

小川一眞印刷・発行による 『日露戦役写真帖』『日露戦役海軍写真帖』について

岡 塚 章 子*

目 次

はじめに

1. 小川一眞について
2. 写真帖の分類と詳細
3. 撮影者について
4. 発行者、印刷所、発行所について

おわりに

図表 東京都江戸東京博物館所蔵、小川一眞
印刷・発行『日露戦役写真帖』および『日露
戦役海軍写真帖』一覧

キーワード 『日露戦役写真帖』、『日露戦役海軍写真帖』、小川一眞、市岡太次郎、
コロタイプ印刷、網目版印刷

はじめに

明治37年（1904）2月8日～明治38年（1905）9月5日におこった日露戦争では、戦況を伝え、戦果を宣伝する数多くの印刷物が作成され広く一般に行きわたった。中でも明治20年代初頭から写真撮影の他、印刷、出版事業も展開していた小川一眞（万延元年（1860）～昭和4年（1929））によって戦争中に刊行が始められた『日露戦役写真帖』、『日露戦役海軍写真帖』は、数多くの種類が存在し、戦争終結後も刊行が続けられた。

本稿では、東京都江戸東京博物館（以下、江戸博）が所蔵する小川一眞印刷・発行による『日露戦役写真帖』と『日露戦役海軍写真帖』計34冊に焦点をあて、改めて書誌学的見地により分類、分析を行い、それぞれの写真帖の特徴を明らかにする。合わせて、日露戦争を記録した写真帖の形態や内容が、戦争の経過とともにどのように変化し、そしてどのような写真によって日露戦争に対するイメージが人々に伝播していったかを検証したい。

*公益財団法人東京都歴史文化財団学芸員

1. 小川一眞について

小川一眞は、武州行田（現、埼玉県行田市）忍城下の成田町にて藩士原田庄左衛門の次男として出生。幼名は朝之助。文久3年、忍藩士小川石太郎の養子となり、名を一眞と改める。慶応4年、藩校「培根堂」に就学。明治6年、東京の報国学社（俗称、有馬学校）に入学。ここで写真好きの英国人教師、カノンと出会い、写真術の存在を知る。明治9年に報国学社を卒業した小川は、埼玉県熊谷市で写真業を営んでいた吉原秀雄の下で働き、湿板写真術を身につけた後、明治10年に群馬県富岡市で撮影業を開始。3年ほど続けた後、再び東京に出、「築地大学校」（通称バラ大学校、現在の明治学院大学の前身）に入学し、語学を身に付ける。

学資をかせぐため横浜警察署にて英語通訳の職に就いた小川は、外国人を通じて海外の情勢を知るにつれ、渡航したいと考えるようになり、横浜の居留地の警察署の警部をしていた兄嫁の弟からアメリカ艦隊の横浜入港を知り渡米を決意。明治15年7月にアメリカ海軍軍艦スワタラ号に乗り込み、横浜を出発¹⁾。スワタラ号は喜望峰を經由し、12月4日にバージニア州ハンプトンローズ港に入港。下艦した小川は、ワシントン、ニューヨークを経て、12月下旬にマサチューセッツ州ボストンに到着。翌年1月からボストンの写真館で働き始める²⁾。

ボストンでコロタイプ印刷術や乾板製造を学んだ小川は、明治17年1月に帰国する。翌、明治18年、麴町区飯田町4丁目に写真館「玉潤館」を開設し、ここで写真撮影を手がけるとともに、コロタイプ印刷も試み、明治22年に日吉町に小川一眞写真製版所を開設してからは、コロタイプ印刷業を本格的に始めるようになる。そして同年10月に創刊された美術雑誌『国華』の複製図版をコロタイプで制作する。明治26年にはアメリカで開催されたシカゴ万国博覧会（5月1日～10月30日）にあわせて開かれた万国写真公会に商議員として参加し、再び渡米。小川はこの時、網目版印刷の存在を知り、アメリカで印刷機械や器具、印刷材料一式を購入して帰国。網目版印刷業を始める。それを示す記事が当時の新聞に出ている。

「小川一眞氏新写真版の開業 小川一眞氏は今度従来の写真版の外に写真彫刻銅版並に亜鉛版を開業したり銅版は頗る緻密なるものにて実物と寸毫の相異なく亜鉛版は銅版の如く密ならざる代りに其儘新聞紙等へも印刷し得べしと言ふ」（明治27年2月15日付『東京朝日新聞』）

記事にもあるように、小川はこれまで手がけてきた写真版（コロタイプ印刷）に加え、明治27年から新写真版（写真彫刻銅版並に亜鉛版印刷＝網目版印刷）も行うようになっていた。

2. 写真帖の分類と分析

写真帖の内訳は、『日露戦役写真帖』32冊、『日露戦役海軍写真帖』2冊からなる。まずそれらを刊行順に整理し、次に本の装丁と奥付の出版情報により、A『日露戦役写真帖』（著作権所有陸地測量部、明治37～38年）、B『日露戦役写真帖』（大本営写真班撮影 陸地測量部特許、明治37～38年）、C『日露戦役海軍写真帖』（市岡太次郎著、明治38年）、D『日露戦役海軍写真帖 全』（市岡太次郎著、明治38年）、E

『日露戦役写真帖』（大本営写真班撮影 陸地測量部蔵版、明治39年）の5種類に分類し、図表を作成した（なお、図表および図1～18については本稿の最後に一括して掲載した）。それぞれの写真帖についての分類理由は下記のとおりである。

A 『日露戦役写真帖』（著作権所有陸地測量部、明治37～38年刊行）

本写真帖が刊行されたのは、開戦から約8か月後の明治37年10月17日である。第1巻が刊行された後、一カ月に1冊、もしくは2冊ずつ刊行が続けられ、江戸博は明治38年12月10日に刊行された第23巻まで所蔵している。写真帖のサイズは約26×38cm、表紙は一色で柄はなく、製本は和装である。

収録されている写真図版はすべてコロタイプで刷られており、それぞれの写真の上部には図版番号と撮影場所や撮影日時などの情報が和文で記され、写真の下には翻訳された英文が記載されている（図2）。

写真の右下には「COPYRIGHT.」、左側に「著作権所有 陸地測量部」とあり、奥付に「著作権所有 陸地測量部」「発行兼印刷者 小川一眞 東京市麻布区麻布宮村町七十一番地」とあることから、陸地測量部が著作権を持ち、写真図版については小川一眞が印刷し、発行も請け負ったことがわかる。

この写真帖の特徴は、編集、出版が編成された軍ごとになされていることである。写真帖の表紙の色は軍ごとに異なり、「第一軍」は紫（口絵23）、「第二軍」は緑青（口絵24）、「第三軍」は赤（口絵25）、「第四軍」はベージュ（口絵26）、「樺太軍」はグレー（口絵27）、「鴨緑江軍及雑之部」は薄いピンク（口絵28）である。最初の刊行は「第二軍」からで、明治37年10月17日に刊行された第1巻の表紙には「日露戦役写真帖 第二軍 第壹号」（口絵24）とあり、目次には「第一巻目録」として、収録されている27点の写真のキャプションが1番から27番まで掲載順に記載されている（図1）。「第二軍」の写真帖はその後「第二軍 第貳号」（明治37年11月10日）、「第二軍 第参号」（明治37年12月1日）、「第二軍 第四号」（明治37年12月10日）、「第二軍 第五号」（明治38年9月20日）、「第二軍 第六号」（明治38年10月1日）と刊行が続き、「第貳号」は28番（図3）～54番、「第参号」は55番～82番、「第四号」は83番～112番、「第五号」は113番～142番、「第六号」は143番～172番と、それぞれの号には約30点の写真が収録され、通し番号が振られている。

「第二軍」の次に刊行されたのは「第一軍」、その後「第三軍」「第四軍」「樺太軍」「鴨緑江軍及雑之部」と続いている。掲載写真については「第二軍」と同じく、軍ごとに通し番号が振られているが、「鴨緑江軍及雑之部」だけは目次に1番～15番、173番～180番、雑4とある。これは1番～15番が「鴨緑江軍」、173番～180番が「第二軍 第六号」の続き、それ以外の写真が4点掲載されているからである。

江戸博が所蔵するのは、第23巻の「鴨緑江軍及雑之部」までだが、国立国会図書館は第24巻の「鴨緑江軍 第二」（明治39年3月10日）を所蔵している。国立国会図書館本は当館所蔵の『日露戦役写真帖』と表紙の柄や装丁が異なり、奥付の情報も「大本営写真班撮影 陸地測量部蔵版」「発行兼印刷者 小川一眞 東京市麻布区麻布宮村町七十一番地」「印刷所 小川写真製版所 東京市京橋区日吉町十三番地」「発行所 小川一眞出版部 東京市京橋区日吉町十四番地」となっているが、目次に記載されている図版番号が16番～43番と「鴨緑江軍及雑之部」の1番～15番に続いており、発行兼印刷者は同じであることから、版は異なるものの、図版については「鴨緑江軍及雑之部」に続くものであると考えられる。

B 『日露戦役写真帖』(大本営写真班撮影 陸地測量部特許、明治37~38年刊行)

本写真帖が刊行されたのは、前述のA『日露戦役写真帖』と同じ明治37年10月17日であり、江戸博は、第壹巻(明治37年10月17日)、第貳巻(明治37年12月26日)、第参巻(明治38年1月31日)を所蔵している。しかし、第貳巻、第参巻については、奥付に「訂正再版」とあることから、この2冊は再版本である。奥付によると、第貳巻は初版が明治37年11月10日、第参巻は初版が明治37年12月1日であることから、第貳巻、第参巻ともに初版はA『日露戦役写真帖』の「第二軍 第貳号」(明治37年11月10日)、「第二軍 第参号」(明治37年12月1日)と同じ日に刊行されていたことがわかる。

写真帖の表紙は薄い青地で、銃を構えて相対する2人の兵士や波、植物が黒い線で描かれ、そこに書名である「日露戦役写真帖 THE RUSSO-JAPANESE WAR」「第壹巻 No.1」と、「大本営写真班撮影 陸地測量部特許」「小川一眞製」「PUBLISHED BY K. OGAWA, TOKYO, JAPAN.」という文字がレイアウトされている(口絵29)。写真帖のサイズは約26×38cmとA『日露戦役写真帖』と同じであるが、製本は洋装である。奥付には「大本営写真班撮影 陸地測量部特許(第貳巻、第参巻は陸地測量部蔵版)」「発行兼印刷者 小川一眞 東京市麻布区麻布宮村町七十一番地」「印刷所 小川写真製版所 東京市京橋区日吉町十三番地」「発行所 小川一眞出版部 東京市京橋区日吉町十八番地」とあり、撮影者や発行者だけでなく、印刷所や発行所についても細かく記載されている。

目次ならびに掲載写真については、A『日露戦役写真帖』と共通であり、図版のサイズもほぼ等しい。第1巻は1番(図4)~27番、第2巻は28番(図5)~54番、第3巻は55番~82番の図版が掲載され、それぞれの写真に付けられているキャプションも同じである。しかし、A『日露戦役写真帖』がコロタイプ印刷で刷られていたのに対し、この写真帖に収録されている写真図版は、すべて網目版印刷で刷られている。また、この写真帖がA『日露戦役写真帖』と大きく異なるのは、表紙と目次の間に中扉(図6)や「詔勅」、「例言」、軍人の肖像写真の頁が付け加えられていることである。

表紙の次頁にある中扉には、「大本営写真班撮影 日露戦役写真帖 陸地測量部特許 第壹巻」「発行所 小川一眞出版部 東京市京橋区日吉町十八番地」と記されており、加えて「THE RUSSO-JAPANESE War: Taken by the Photographic Department of the Imperial Headquarters. No. 1.」「PUBLISHER K. OGAWA, F. R. P. S., Tokyo, Japan.」「AGENTS. KELLY WALSH, Ltd., Yokohama, Shanghai, Hongkong and Singapore. (Copyright 1904, by the Military Survey Department.)」と英文表記もある。ここに「AGENTS. KELLY WALSH, Ltd., Yokohama, Shanghai, Hongkong and Singapore.」とあることから、本写真帖は、KELLY WALSH社を仲介として、海外でも販売されていたことがわかる。

中扉の次には、御名御璽として明治37年2月10日付の「詔勅」があり、その次に明治37年10月 小川一眞謹誌として「日露戦役写真帖 例言」がある。小川一眞はここで、「これまで、日清戦争の写真帖を大本営から、北清事変の写真帖を第五師団から、陸軍大演習の写真帖の発行を参謀本部から許可され、海軍からも機密の業務を受けてきた。今回の日露戦争では、大本営の特命により、大本営が各軍に派遣した写真班が撮影した数多くの写真を順次編集し、日露戦役写真帖と題して、今後続けて刊行する許可を得た」と書いており、小川が軍の許可を得て写真帖を刊行したことが書かれている。そして次頁には軍服姿をした陸軍参謀本部の長岡外史と山縣有朋の2名の写真が「参謀次長 長岡陸軍少将」「参謀総長

元帥 山縣侯爵」のキャプションとともに掲載されている。

A『日露戦役写真帖』が写真のみであったのに比べ、本写真帖には「詔勅」や軍人の肖像が掲載され、戦争色が強くなっている。奥付に「正価金六拾銭」と記載されていることから、一般に販売されたことがわかる。

C『日露戦役海軍写真帖』（市岡太次郎著、明治38年）

本写真帖は海軍の戦闘状況を撮影した写真を編集したものであり、江戸博が所蔵するのは明治38年4月15日に刊行された第一巻のみである。

写真帖の表紙は薄紫色で柄はなく、そこに黒文字で「海軍省認可 日露戦役海軍写真帖 第一巻」「NAVAL THE RUSSO-JAPANESE WAR PUBLISHED BY K.OGAWA, TOKYO, JAPAN, No.1」と書かれている。

表紙の右上には「明治三十八年四月十二日 第三種郵便物認可 毎月一回十五日発行」とあり、この写真帖が第三種郵便物であることがわかる（口絵30）。

通信省令第四号「第三種郵便物認可規則ヲ定ム」（明治25年2月5日制定）によれば、第三種郵便物と認められるためには、「①毎月1回以上、号を追って定期的に発行するもの」「②掲載事項の性質上発行の終期を予定し得ないもの」「③書籍の性質を有さないもの」「④発行の目的が政事、時事、学術、商事、工芸、その他公共的な事項を報道し論議することを目的とし、広く公衆に発売されるもの」の4つの条件を満たす必要がある。

戦争報道を目的として発行された本写真帖は公共性があり、なおかつ終刊時期が予測できないものであることから、第三種郵便物の対象となったのであろう。認可を受けるためには発行人が印刷した見本を添えて申請する必要があることから、小川一眞が通信省に願い出たと考えられる。

表紙の次の中扉にも「海軍省認可 日露戦役海軍写真帖 第一巻」「発行所 小川一眞出版部 東京市京橋区日吉町十八番地」とある。英訳も記されており、「THE RUSSO-JAPANESE WAR: NAVAL. Permitted by the Naval Department. No. 1.」「PUBLISHER K. OGAWA, F. R. P. S., Tokyo, Japan.」「AGENTS. KELLY WALSH, Ltd., Yokohama, Shanghai, Hongkong and Singapore. Copyright 1904, by T. Ichioka.」とあり、扉のレイアウトならびに基本情報は、B『日露戦役写真帖』と似ている（図7）。しかし、B『日露戦役写真帖』では著作権についての英文表記が「Copyright 1904, by the Military Survey Department.」となっているところを、本写真帖では、「Copyright 1904, by T. Ichioka.」とあり、海軍技師の市岡太次郎が著作権者であることが明記されている。

本写真帖に収録されている写真図版は、すべて網目版印刷で刷られており、A『日露戦役写真帖』、B『日露戦役写真帖』と同じく、写真には図版番号が振られ、撮影場所や撮影日時などの情報が和英で併記されている。しかし、本写真帖では、写真の横に「市岡海軍技師撮影」「蘆野海軍教授撮影」のように撮影者の名前が記されており、一律に「著作権所有 陸地測量部」と表記されていたそれまでの写真帖とは、写真図版の扱いが異なる（図8）（図9）。

写真帖には、軍服姿をした海軍の東郷平八郎、上村彦之丞、片岡七郎の3名の写真が「連合艦隊司令

長官東郷海軍大将」「第二艦隊司令長官上村海軍中将」「第三艦隊司令長官片岡海軍中将」のキャプションとともに掲載されており、B『日露戦役写真帖』の構成をそのまま海軍に置き換えたような形になっている。

しかし、江戸博が所蔵するこの写真帖に関しては、表紙から写真図版の部分と奥付・裏表紙に、いくつかの不一致点が見られる。まず表紙の色が薄紫色であるのに対し、裏表紙は濃い紫色である。また海軍写真帖であるにもかかわらず、奥付に記載されている情報がB『日露戦役写真帖』と同じであり、「大本営写真班撮影 陸地測量部蔵版」となっている。そして発行日は明治38年2月10日であり、第三種郵便物として認可された4月12日以前の日付となっている。

写真帖の装丁は洋装であるが、よく見ると背の部分がテープでくるまれ製本されている。これらのことから、江戸博所蔵本は奥付が何らかの理由で欠損してしまったため、『日露戦役写真帖』の奥付を付け加えて一冊にしたものと推察される。『日露戦役海軍写真帖』は国立国会図書館も所蔵しており、こちらの奥付は「明治38年4月15日発行」「著作者 市岡太次郎 本郷区丸山新町十九番地」「正価金六拾銭」となっていることから、江戸博所蔵本も正しくは著作権者市岡太次郎、4月15日が出版日である。

D『日露戦役海軍写真帖 全』（市岡太次郎著、明治38年）

本写真帖は、前述のC『日露戦役海軍写真帖』から約10ヶ月後の明治38年12月25日に刊行された。日露戦争は明治38年9月5日に終結しているため、本写真帖は、日本の勝利が確定してからの刊行である。表紙は黒地で、バラの花と海に浮かぶ軍艦の絵が線で描かれ、金文字で「海軍省認可 日露戦役海軍写真帖 小川一眞製」と記されている（口絵31）。裏表紙にも同じく金文字で「NAVAL THE RUSSO-JAPANESE WAR PUBLISHED BY K. OGAWA TOKYO JAPAN」との記載があり、植物とトンボ、小川一眞のイニシャルであるK.O.を組み合わせたマークが描かれている。描かれている植物は、一見するとオリーブのように見えるが、勝利を示す月桂樹を表したものだと思われ、トンボは勝ち虫であることから、本写真帖が日露戦争の勝利を祝して出版されたことがわかる。製本は洋装でハードカバーである。

図版は全て網目版印刷で、和英でキャプションがつけられている。掲載写真は全部で119点あり、C『日露戦役海軍写真帖』と同一イメージの写真がいくつも見られ、サイズもほぼ等しいことから（図10）（図11）、本写真帖は、これまで印刷、刊行された海軍の写真を1冊にまとめたものと推察される。C『日露戦役海軍写真帖』と異なる点は「日露戦役海戦公報」と題して「旅順の夜襲」「仁川の海戦」など、海軍の戦闘についての解説文が掲載され、英訳もされている。奥付には「著作権 市岡太次郎 本郷区丸山新町十九番地」とあり、市岡太次郎が著作権者であることが明記されている。

E『日露戦役写真帖』（大本営写真班撮影 陸地測量部蔵版、明治39年）

本写真帖も戦争終結後に刊行されており、当館は「第一軍」「第二軍」「第三軍」「第四軍」「樺太軍」「鴨緑江軍」の6冊を所蔵している。刊行日は全て明治39年2月26日であることから、一括して出版されたことがわかる。

表紙には、戦場を眺める兵隊の姿のイラストが描かれ、白文字で「大本营写真班撮影 陸地測量部蔵版 日露戦役写真帖 第一軍 小川一眞製」（口絵32）と記されている。表紙の色や描かれているイラストの色は軍によって異なるが、表紙の柄や装丁は6冊とも共通である。

本写真帖の特長は、編成された軍が一冊になっていることである。奥付に「第壹軍合本」「第貳軍合本」のように、6冊全てに合本と記載があることから、これまでの写真帖をまとめたものであることがわかる。そしてD『日露戦役海軍写真帖』と同じく、「日露戦役陸戦公報」と題して「定州の占領」「鴨緑江附近ノ戦」など、陸軍の戦闘についての解説文が掲載されている。印刷はそれまでのものと同様、全て網目版であるが、紙は薄く、以前の写真帖と比べ、画質が悪い。これは出版にあたって新たに製版したのではなく、以前のものをそのまま使用したため、版が摩耗していたからだと考えられる。

販売価格はそれぞれ異なり、60銭から2円20銭まで幅がある。これは写真帖のページ数によるもので、多いものは高く、少ないものは安く設定されている。戦争が終結し、それまでの戦果をまとめ、勝利を知らしめるため刊行されたのがこの写真帖であろう。新に加えられた写真に「満州軍総司令部ノ凱旋」（其一）～（其四）があり、日本の勝利を示す内容になっている。

3. 撮影者について

『日露戦役写真帖』には、奥付に「著作権所有 陸地測量部」や「大本营写真班撮影」とあるものの、写真にも目次にも具体的な撮影者名の記載はない。よって写真帖からは撮影者を特定することはできないが、戦地で撮影を行った写真師として、小川一眞の門下である浅井魁一、江南信国、大塚徳三郎、そして岡本月村、小笠原長政、小倉俊司、鹿島清二郎、田山花袋、柴田常吉、清水潔、坪谷水哉、波多仲斎月、松永学郎、若林庄司らがいる⁴⁾。しかし、ここに挙げた全員が大本营の命を受けて従軍したわけではなく、江南、波多仲、若林は実業之日本社から、柴田は博文館、坪内は写真画報社といったように、出版社の依頼で特派員として現地に赴いた者もいた。正式に命を受け従軍した清水潔は、大本营写真班の班長として、第三軍と行動を共にし、旅順攻囲戦の撮影を行った。軍の数は全部で6あったことから、撮影者の人数も多かったと考えられ、ここで挙げた人物以外にも数多くの写真師が従軍したと推察される。

『日露戦役海軍写真帖』では、一枚一枚の写真の横に海軍の技師や教授の名前が撮影者として記載されており、まとめられた写真帖には著作権者として海軍技師の市岡太次郎の名前が記されている。

市岡太次郎（1870-1941）は、岐阜県に生まれ、明治23年東京帝国大学化学科を卒業し海軍に入隊⁵⁾。化学の知識を活かし、尋常中学、尋常師範学校の化学の教科書として使用されることを目的とした、『新編化学』（東京・内田老鶴圃刊、明治24年11月）を編纂する。

海軍教授となった市岡は、明治31年6月、海軍教授から海軍技師に転官した⁶⁾。海軍では火薬の研究を行い、明治36年、無煙火薬製造法で特許を取得している⁷⁾。そして日露戦争には海軍技師として従軍、写真撮影を行った。

日露戦争での従軍が影響したのか、明治40年3月7日、市岡は病名を脳神経衰弱症とした診断書を添

付した退官願いを出し受理されている⁸⁾。退官後の市岡は、小川一眞が神奈川県平塚に設立した日本乾板株式会社に技師長として入社し、乾板の研究を行った。市岡と小川の接点は、やはり写真帖の出版であろう。国産乾板の製品化を目指していた小川一眞は、写真撮影の技術と化学の知識を持った市岡の能力を高く評価し、自社に招いたと考えられる。

4. 発行者、印刷所、発行所について

A～Eの写真帖の刊行時期や内容はそれぞれ異なるが、発行者ならびに、印刷所、発行所は同じであり、全て小川一眞が手がけている。B『日露戦役写真帖』の「例言」にあるとおり、小川一眞は大本営からの命により写真帖の出版をすることになり、明治37年7月25日、日露戦役に関する写真製版、印刷及び発行を陸地測量部より受託している⁹⁾。

刊行された写真帖には、コロタイプ印刷と網目版印刷があるが、これは、小川一眞がそれぞれの写真帖の制作部数と求められる画像のクオリティーにあわせて印刷方法を使い分けていたと考えられる。

コロタイプ印刷は、網目スクリーンを使っての印刷方式ではなく、ゼラチン表面にできた細かいしわで階調を表現するため、中間の階調表現に適している。また感光液を塗ったガラス板にネガを焼き付けて版をつくるため、写真を印刷する場合は撮影ネガをそのまま焼き付ければ版が出来る。よって紙焼きを作成する必要もなく、ネガから直接製版するため、極めて写真に近い精緻な画像を得ることができる。しかし、コロタイプの版はデリケートなため、一つの版では500枚くらいしか刷ることができず、大量印刷には適さないという欠点がある。一方、網目版印刷で写真を印刷する場合は、網目スクリーンを通して反射原稿であるネガから焼き付けた紙焼きの写真を撮影し、それを銅板に焼付け、腐食させて版を作るため、コロタイプ印刷に比べ、版が出来上がるまでの工程が多い。また画像が網点に変換されているため、紙焼きの写真と比べて画像が粗くなる。加えて凸部分にインキをのせて刷るため、画像がつぶれやすい。このような理由から、中間の階調表現を出しにくいという欠点があるが、銅板は丈夫なため、一つの版で10000枚以上刷ることができ、大量生産に適している。

このように見ると、コロタイプ印刷で刷られている「A『日露戦役写真帖』（著作権所有 陸地測量部、明治37～38年刊行）」は、軍関係者など限られた人々を対象として制作され、それ以外の網目版で刷られた写真帖は、広く一般に頒布することを目的に制作された普及版と推察される。

おわりに

写真帖を5種類に分類し、それぞれについて比較、分析を行った。ここで判明したことは、下記の6点である。①写真帖は戦争開始から8ヶ月後に刊行が始まり、終結後も刊行が続けられた。②写真につけられているキャプションは和英併記であり、国外での販売も視野に入れていた。③写真帖は陸軍と海軍に大別でき、陸軍については撮影者の記載はないが、海軍については撮影者が記載されている。④撮影された写真は繰り返し使用され、同じ内容の写真を組み換え、写真帖の装丁を変えながら何度も刊行

された。⑤戦争終結後に出された写真帖は、それまでの写真に戦闘についての解説や凱旋時の写真が加えられ、編集し直して刊行された。⑥印刷、発行は全て小川一眞によるものであり、印刷はコロタイプと網目版の両方が使われた。

ここでは江戸博の所蔵資料について述べたが、国立国会図書館蔵には、『日露戦役海軍写真帖』「第1巻」（明治38年4月15日）、「第2巻」（明治38年6月1日）、「第3巻」（明治38年7月20日）、「第4巻」（明治38年12月1日）や、明治39年2月15日刊行の『日露戦役鴨緑江軍記念帖』などがあり、他にも多数の写真帖の存在が確認されている。また江戸博の所蔵資料には、写真帖以外に、明治38年1日1日の『東京朝日新聞』の附録（47×64cm）がある（図12）。同日の本紙には「新年大附録 日露戦局経過全図」との見出しで「本図は開戦以来彼我接戦の地点及我軍の占領したる地域を明細に描写したるもの一見戦局の経過を詳知せしむ。」と書かれている。読者に戦況を伝えることを目的とし、また元旦に出すことで、戦局への関心を高め、戦意高揚も狙ったのであろう。附録の左下には「小川一眞製版印刷」と記されており、写真帖同様、これについても小川が印刷を行っている。

附録の掲載写真は、その後刊行されたA『日露戦役写真帖』「第三軍 第貳号」（図13）、「第三軍 第五号」（図14）（図15）、C『日露戦役海軍写真帖』に使われており、先に新聞で発表し、その後写真帖に加えたことがわかる。

日露戦争を撮影した写真は印刷物としてだけではなく、写真そのものの展示も行われた。明治38年4月、小川一眞によって「日露戦役彩色大写真展覧会」が上野公園、旧博覧会跡第5号館で開催され、次のような報道がなされている。

「彩色大写真展覧会 小川一眞氏の催にかかる同会ハ一昨日より上野五号館にて開かれたり陸軍の部の写真は百枚海軍のハ廿枚孰れも縦三尺六寸横五尺二寸に引延したる者外に将校の肖像を縦三尺一寸五分横二尺五寸五分に撮影して掲げ尚皇族方の御尊影をも掲ぐ原板の参謀本部写真班の非常の苦艱に堪へて写つしたるを伊藤函嶺氏の彩色したるなりと会場の装飾の行届けるハ是迄の展覧会に例なき所なり。」¹⁰⁾

この記事によれば、出品点数は陸軍の部が100枚、海軍の部が20枚、何れも写真のサイズは約1.1メートル×1.6メートルとかなり大きく、この他にも約95センチ×77センチの将校の肖像、皇族方の肖像写真も展示され、着色は画家の伊東函嶺が行ったとある。

開催時の会場外観写真（図16）を見ると、「日露戦役彩色大写真展覧会」「会主 小川一眞」と入口に大きく文字が掲げられ、この催しが小川によるものであることがわかる。展示室内の写真を見ると、数多くの肖像写真や戦地の写真が額に入れられて飾られており、写真帖に掲載された写真と同じカットが引き伸ばされ展示されている（図17、18）。会場には販売所が設けられ、「記念絵はがき」が6枚一組で十銭で売られ、上からは「日露戦役写真帖」と書かれた垂れ幕が下がっている（図18左上）。

戦争終結前に開催された本展は、明治38年1日1日の『東京朝日新聞』の附録と同じく、戦意高揚を狙ったものと推察されるが、小川一眞にとっては、写真帖を宣伝・販売する絶好の機会であったことは間違いない。

このように、日露戦争では数多くの写真が撮影され、何種類もの写真帖が刊行された。また展覧会も開催され、日露戦争のイメージは写真により一気に社会に広まっていった。写真帖の制作には、軍の後

押しがあったとはいえ、短期間に装丁を変えながら何度も刊行されていることから、写真帖そのものが記録写真集としての地位を確立し、出版物として成功をおさめ、社会的人気を博したことが伺える。それを可能としたのは、小川一眞の印刷、出版の技術力と、趣向を変えながら版を重ねていった企画力であった。小川一眞はその後、日露戦争に関する一連の功績により、明治39年4月1日付で勲五等双光旭日章を受章する¹¹⁾。小川は受章を契機としてその後様々な榮譽に浴し、明治43年には写真師として初の帝室技芸員を拝命する。

本稿では、江戸博の所蔵資料である日露戦争時に出版された写真帖を中心に考察を行ったが、明治期の出版文化に多大な功績を残した小川一眞関わった印刷物については、今後さらに調査を進めていく必要があるだろう。

本稿執筆にあたり、東京都江戸東京博物館の専門研究員 田原昇氏、司書 楯石もも子氏、学芸員 田中美穂氏、東京都写真美術館の専門調査員 金子隆一氏にご協力をいただきました。ここに記して深く感謝いたします。

【註】

- 1) 「小川先生略伝」『創業記念参十年誌』小川同窓会、大正2年8月15日、1～2ページ
「写真研究の苦心 小川一眞氏の懐旧談」前掲書88ページ
小川の履歴については、上記ページ以外の箇所にも記載されている
- 2) 鈴木紀三雄「史料紹介 小川一眞のアメリカ留学中書簡について」『行田市郷土博物館研究報告第5集』行田市郷土博物館、平成13年3月、1ページ
- 3) 「第三種郵便物認可規則ヲ定ム」明治25年2月5日、国立公文書館本館-2 A-011-00・類00621100
- 4) 『日本写真界の物故功労者顕彰録』梅本貞雄、小林秀三郎編、日本写真協会、1952年
- 5) 前掲書
- 6) 「市岡太次郎外一名銓衡の件」明治31年6月11日、国立公文書館本館-2 A-018-00・任B00196100
- 7) 「無煙火薬製造法」特許権者（発明者）市岡太次郎、特許第6469号、独立行政法人工業所有権情報・研修館
- 8) 「海軍技師市岡太次郎依願免本官ノ件」明治40年3月14日、国立公文書館本館-2 A-019-00・任B00464100
- 9) 「小川先生略伝」『創業記念参十年誌』小川同窓会、大正2年8月15日、11ページ
- 10) 『読売新聞』明治38年4月4日朝刊、1ページ
- 11) 9) に同じ

図表 東京都江戸東京博物館所蔵、小川一眞印刷・発行『日露戦役写真帖』および『日露戦役海軍写真帖』一覽

A. 日露戦役写真帖 寸法：26×38cm

資料番号	書名（表紙記載）	目次記載	出版年月日	著作権	発行者	印刷所	発行所	印刷技法	製本	価格
90208404	第二軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版1-27番のキヤブ ジョン	明治37年 10月 17日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208405	第二軍 日露戦役写真帖 第貳号	写真図版28-54番のキヤブ ジョン	明治37年 11月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208406	第二軍 日露戦役写真帖 第参号	写真図版55-82番のキヤブ ジョン	明治37年 12月 1日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208407	第二軍 日露戦役写真帖 第四号	写真図版83-112番のキヤブ ジョン	明治37年 12月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208401	第一軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版130番のキヤブ ジョン	明治38年 1月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208402	第一軍 日露戦役写真帖 第貳号	写真図版31-60番のキヤブ ジョン	明治38年 2月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208410	第三軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版1-27番のキヤブ ジョン	明治38年 3月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208411	第三軍 日露戦役写真帖 第貳号	写真図版28-53番のキヤブ ジョン	明治38年 3月 25日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208412	第三軍 日露戦役写真帖 第参号	写真図版54-79番のキヤブ ジョン	明治38年 4月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208413	第三軍 日露戦役写真帖 第四号	写真図版80-107番のキヤブ ジョン	明治38年 5月 5日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208414	第三軍 日露戦役写真帖 第五号	写真図版108-133番のキヤブ ジョン	明治38年 5月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208415	第三軍 日露戦役写真帖 第六号	写真図版134-162番のキヤブ ジョン	明治38年 6月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208416	第三軍 日露戦役写真帖 第七号	写真図版163-191番のキヤブ ジョン	明治38年 6月 20日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208417	第三軍 日露戦役写真帖 第八号	写真図版192-224番のキヤブ ジョン	明治38年 7月 1日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208418	第四軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版31-60番のキヤブ ジョン	明治38年 7月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208419	第四軍 日露戦役写真帖 第貳号	写真図版61-90番のキヤブ ジョン	明治38年 8月 15日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208420	第四軍 日露戦役写真帖 第参号	写真図版91-119番のキヤブ ジョン	明治38年 9月 1日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208403	第一軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版130番のキヤブ ジョン	明治38年 9月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208408	第二軍 日露戦役写真帖 第五号	写真図版113-142番のキヤブ ジョン	明治38年 9月 20日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208409	第二軍 日露戦役写真帖 第六号	写真図版143-172番のキヤブ ジョン	明治38年 10月 1日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208421	樺太軍 日露戦役写真帖 第壹号	写真図版1-30番のキヤブ ジョン	明治38年 10月 20日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208422	樺太軍 日露戦役写真帖 第貳号	写真図版31-56番のキヤブ ジョン	明治38年 11月 20日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし
90208423	朝鮮江軍 及雜之部 日露戦役写真帖 第23巻目録	写真図版1-15/173-180/ 雜4点のキヤブジョン	明治38年 12月 10日	著作権所有 陸地測量部	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	記載なし	記載なし	コロタイプ	和装本	記載なし

B. 日露戦役写真帖 寸法：26×38cm

資料番号	書名(表紙記載)	奥付	目次記載	出版年月日	著作権	発行者	印刷所	発行所	印刷技法	製本	価格
90362363	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第壹巻	奥付に 「訂正再版」 とあり	写真図版1-27番のキャブ ション 第1巻目録	明治37年 10月 17日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町18番地	網目版	洋装本	60銭
90364470	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第貳巻	奥付に 「訂正再版」 とあり	写真図版28-54番のキャブ ション 第2巻目録	明治37年 12月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町18番地	網目版	洋装本	60銭
90364471	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第参巻	奥付に 「訂正再版」 とあり	写真図版55-82番のキャブ ション 第3巻目録	明治38年 1月 31日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町18番地	網目版	洋装本	60銭

C. 日露戦役海軍写真帖 寸法：26×38cm

資料番号	書名(表紙記載)	著作権	目次記載	出版年月日	著作権	発行者	印刷所	発行所	印刷技法	製本	価格
90364472	海軍省認可 日露戦役海軍写真帖 第一巻	背表紙に 「全」とあり	写真図版1-30番のキャブ ション 第1巻目録	明治38年 4月 15日	中原にCopyright 1904 T. Ichioikaと記載あり 著作者 市岡太次郎/ 本郷区丸山新町19番地	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町18番地	網目版	洋装本	60銭

D. 日露戦役海軍写真帖 全 寸法：26×38cm

資料番号	書名(表紙記載)	背表紙	目次記載	出版年月日	著作権	発行者	印刷所	発行所	印刷技法	製本	価格
91009291	海軍省認可 日露戦役海軍写真帖	背表紙に 「全」とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治38年 12月 25日	著作者 市岡太次郎/ 本郷区丸山新町19番地	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	洋装本	記載なし

E. 日露戦役写真帖 寸法：26×38cm

資料番号	書名(表紙記載)	奥付	目次記載	出版年月日	著作権	発行者	印刷所	発行所	印刷技法	製本	価格
91009279	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第一軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	90銭
91009280	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第二軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	1円80銭
91009281	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第三軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	2円20銭
91009282	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 第四軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	90銭
91009283	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 鴨綠江軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	60銭
91009284	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許 日露 戦役写真帖 樺太軍	奥付に「合本」 とあり	図版番号はなく、写真キャブ ションのみ	明治39年 2月 26日	大本宮写真班撮影、 陸地測量部特許	発行兼印刷者 小川一眞/ 麻布区麻布宮村町71番地	印刷所 小川写真製版所/ 京橋区日吉町13番地	発行所 小川一眞出版部/ 京橋区日吉町14番地	網目版	和装本	60銭

<p>CONTENTS.</p> <p>Part I.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The Landing-place in Yenta Bay. 2. Casualties of the Second Infantry of the Thirtieth Field Artillery Regiment from a hill north of Wanchichuan. 3. The wounded in the Depot Hospital in Tientsin. 4. Japanese shells exploding at the Battery of Tientsin. 5. Casualties of the First Field Artillery Regiment from the position west of Sienow. 6. Forward Service of the Twenty-fourth Infantry Regiment at Hanchowang. 7. Railway Transportation in the vicinity of Wanchichuan. 8. Casualties of the Third Field Artillery Regiment from a hill north of West Shuangping-shan. 9. Remains of a railway bridge destroyed near Wanchichuan. 10. The Field Telegraph Corps of the Sixth Division at work. 11. Outside the East Station gate of Kaiping. 12. The Fourth Infantry Regiment crossing the military bridge over the Hanchowang River. 13. A Russian prisoner of war. 14. Examination of a prisoner of war. 15. Russian soldiers helped in the Kaiping Hospital. 16. Building a bridge over the Kaiping River. 17. Detachment on a hill northwest of Hanchowang. 18. Casualties of the Third Field Artillery Regiment at Tachichuan. 19. Cattle captured at Tachichuan. 20. Casualties of the Third Field Artillery Regiment at Tachichuan. 21. The wounded under treatment of the Medical Corps of the Sixth Division in a field at Kaiping. 22. Remains of steam killed in the battle at Tachichuan. 23. Remains of the destroyed railway bridge over the Tachow River. 24. The Japanese Military Administration Office at Yingchow. 25. Release at Yingchow of an army surgeon and his party who were prisoners of war. 26. Yantai gathered in the port of Yingchow after its occupation. 27. The Chinese police cage at Yingchow. 	<p>第一卷 目録</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鹽大澳上陸地 (1) 2. 鴨窩ノ北方砲臺遺跡中二營隊聯二十師兵隊戰跡 (2) 3. 戰傷ノ於 (3) 4. 漢口ノ砲臺ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (4) 5. 戰傷ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (5) 6. 戰傷ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (6) 7. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (7) 8. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (8) 9. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (9) 10. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (10) 11. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (11) 12. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (12) 13. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (13) 14. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (14) 15. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (15) 16. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (16) 17. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (17) 18. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (18) 19. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (19) 20. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (20) 21. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (21) 22. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (22) 23. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (23) 24. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (24) 25. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (25) 26. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (26) 27. 遺跡ノ遺跡ニ於テ一連隊中隊 (27)
--	---

【図1】『日露戦役写真帖』「第二軍 第壹号」第一卷目録 明治37年10月17日



【図2】「(1) 鹽大澳上陸地」『日露戦役写真帖』「第二軍 第壹号」明治37年10月17日



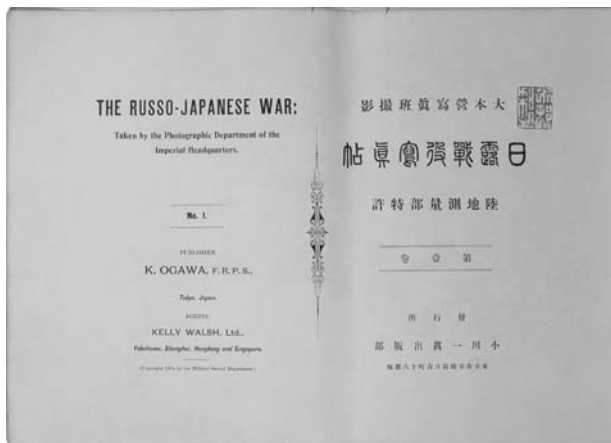
【図3】「(28) 鴨窩ノ北方高地ニ於ケル其歩兵聯隊一部ノ集合」『日露戦役写真帖』「第二軍 第貳号」明治37年11月10日



【図4】 「(1) 鹽大澳上陸地」『日露戦役写真帖』「第壹卷」明治37年10月17日



【図5】 「(28) 蓋平ノ北方高地ニ於ケル其歩兵聯隊一部ノ集合」『日露戦役写真帖』「第貳卷」明治37年11月10日



【図6】 『日露戦役写真帖』「第壹卷」中扉 明治37年10月17日



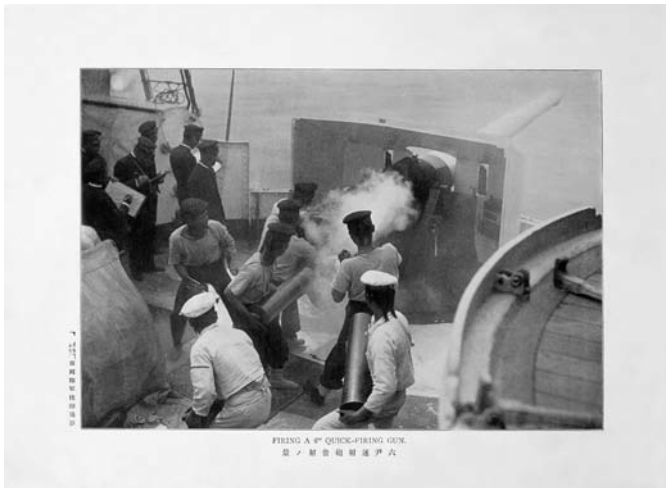
【図7】 『日露戦役海軍写真帖』「第一卷」中扉 明治38年4月15日



【図8】 市岡海軍技師撮影「(13) 六寸速射砲発射ノ景」『日露戦役海軍写真帖』「第一巻」明治38年4月15日



【図9】 市岡海軍技師撮影「(16) 機械水雷爆発ノ景」『日露戦役海軍写真帖』「第一巻」明治38年4月15日



【図10】 市岡海軍技師撮影「六寸速射砲発射ノ景」『日露戦役海軍写真帖 全』明治38年12月25日



【図11】 市岡海軍技師撮影「機械水雷爆発ノ景」『日露戦役海軍写真帖 全』明治38年12月25日



【図12】 『東京朝日新聞』附録 明治38年1日1日



【図13】 「(53) 第三軍司令部屋後天幕内ニ於ケル内外貴賓ノ会食」『日露戦役写真帖』「第三軍 第貳号」 明治38年 3月25日



【図14】 「(110) 盤龍山西砲台咽喉部ニ於ケル歩哨線(二龍山ニ対する面)」『日露戦役写真帖』「第三軍 第五号」 明治38年 5月10日



【図15】 「(112) 盤龍山西砲台内壘道ノ交叉点ヨリ複郭ノ一部ヲ仰望ス」『日露戦役写真帖』「第三軍 第五号」 明治38年 5月10日



【図16】 「日露戦役彩色大写真真覽會」開催時の会場外観写真、『創業紀年参十年誌』小川同窓会、大正2年掲載



【図17】 「日露戦役彩色大写真真覽會」展示室内、『創業紀年参十年誌』小川同窓会、大正2年掲載



【図18】 「日露戦役彩色大写真真覽會」展示室内、『創業紀年参十年誌』小川同窓会、大正2年掲載